

アジアタイムズ社説「中国の外交的勝利は米国の失敗がもたらす」

以下の記事は、アジア・タイムズ紙無料記事の、AALA ニュース編集部による和訳である。なお訳出にあたって、Google の無料翻訳機能を活用し、その出力結果を一部修正したが、速報のための仮訳として理解いただきたい。
(SS)

Asia Times
MARCH 30, 2023

オピニオン： 中国の外交的勝利は米国の失敗がもたらす ――米国は、他国民を排除すれば、いずれ自分も排除される

OPINION China's diplomatic wins rise from America's losses
――US is learning the hard way that if you treat everyone else as a pariah
you are eventually treated as one yourself

<https://asiatimes.com/2023/03/chinas-diplomatic-wins-rise-from-americas-losses/>

By CHRISTOPHER MCCALLION

ここ数週間の中国の外交的な動きは、ワシントンの外交政策関係者やメディアの間にさまざまな警戒感を生んでいる。

「アメリカの影響力が新しい敵対的な "世界秩序 " に取って代われようとしているのではないか？」と。

現在の出来事をバランス・オブ・パワーの観点でとらえることが、「なぜこのような事態になったのか」を説明するのに役立つ。

中国の習近平国家主席はモスクワを訪問し、中露の "限界なきパートナーシップ " を確認した。

その同じ週に、国際刑事裁判所 (ICC) はプーチン大統領の戦争犯罪に対する逮捕状を発行した。

今月初め中国は、湾岸諸国のライバル同士サウジアラビアとイランの間で、国交回復を成功させた。

2月下旬、北京はウクライナ戦争に関する 12 項目の和平案を発表し、キエフは懐疑と開放の両義的姿勢を示した。

習近平はモスクワ訪問の最後に、プーチン大統領にこう語った。
「われわれと一緒にやれば、世界の変ぼうを作り出すことができる」

アメリカのコメンテーターたちはこう見ている。
中国が「ユーラシア・ブロックのリーダーとして台頭しつつある。何世代にもわたって外交を支配してきた同盟関係や対立関係は根底から覆された。そして「反米を主軸とする世界秩序が形成されつつある」

問題は、この対立がヒートアップして核保有3カ国を第三次世界大戦の瀬戸際に追いやめるのか、それとも「冷戦 ver.2」の幕開けを告げるだけにとどまるのかだ。

第三次世界大戦も冷戦 2.0 も我々は回避できるのか、また、中国の外交的な誘いかけにこれほど好意的な聴衆が登場したのはなぜなのか。
これらの問いに関心を持つ人はほとんどいないようだ、

特筆すべき例外は、ファリード・ザカリアの最近のコラム、「アメリカの一極集中は外交エリートを墮落させた」というもの。
これによると、「わが国の外交政策は、要求を出し、脅しや非難をし、という行動に終始することがあまりにも多い。相手の意見を理解したり、実際に交渉したりする努力はほとんどなされていない」のだ。

バイデン政権が国際政治を「民主主義対独裁主義」の闘争と決めつけ、アメリカが同盟国以外との有意義な外交を避けていることを考えれば、ワシントンが北京、モスクワ、テヘラン、リヤドとの関係から締め出されるのは当然である。

北京は最近、アメリカが中国を「封じ込め」ようとしていると、異例なほど強い言葉で述べた。

この評価は、台湾に対するアメリカの関与がますます明確になっていることや、西側諸国が中国への技術輸出を制限していることを考慮すれば、正確なものと思われる。

「欧州の指導者たちはプーチンを ICC に引き渡すべきだ」というブリンケン国務長官の発言は、「ルールに基づく国際秩序」を守ると主張する米国の偽善性を自ら暴露している。

想起せよ、ICC（国際司法裁判所）は米国がその権限すら認めていない組織である。

それだけではない。ブリンケン発言はモスクワの政権交代が米国の公式方針であると宣言したに等しい。

それは、ウクライナ紛争をより難航させ、危険なエスカレーションの可能性を高める恐れがある。

ICC はプーチンに逮捕状を発行することで、ウクライナ紛争の最終的な解決を含め、モスクワがもはや西側諸国と通常的外交を行えないようにしたにすぎない。

これによって、戦争終結を交渉する調停役は西側諸国からは出現しないことが明らかになった。調停役は西側出身者でもなく、西側の意向を反映する国や組織でもない、ということになるだろう。

バイデンはトランプ政権のイランに対するタカ派路線を継続した。そして JCPOA 核協定の復活に失敗した。その一方で、テヘランの宿敵であるサウジアラビアを“のけ者” pariah にした。

バイデン政権は一方で、テヘランの宿敵サウジアラビアを「のけ者」にした。

こうして何十年にもわたりこの地域のお気に入りだったにもかかわらず、アメリカはリヤドでもエルサレムでも影響力を失いつつある。

サウジアラビアとシリアも和解寸前にある。こちらはモスクワの仲介によるようだ。

中国が中東で交渉を仲介し、関与を強めていることは、アメリカにとって悪いこととは言い難い。

フリードマンが最近書いているように、アメリカがこの地域からの離脱し、その「空白」を中国が埋めたとしても恐れる必要はない。

実際、皮肉屋の現実政治家は望んでいる。北京がわれわれの足跡をたどるほどに愚かであることを。

過去数十年間のアメリカ外交のスコアカードは、決して芳しいものではない。アメリカは、ユーラシア大陸における覇権国の出現を避けようとしてきた。

それなのにアメリカは他の 2 つの大国を、同盟関係にまとめあげてしまった。それは主にアメリカへの反発によって結ばれたものである。

中東のパワーバランスは力勝負だ。さほど繊細なものではない。米国はすべての当事者に対して相対的に最大限の影響力を行使できる。米国はそうやって、湾岸地域の主要な二人のプレーヤーを引き離す方法を見つけた。つまり、誰が誰を孤立させるのか、という話だ。

外交政策当局はイランに敵対する同盟を形成しようと頑張ってきたが、誰かを " 除け者 " として扱えば、やがて自分自身も除け者になってしまう可能性がある。

Christopher McCallion is a Fellow at Defense Priorities. This article is republished with the kind permission of Defense Priorities